

寄稿

人口減少社会と

地方都市の活力再生

76

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
主 席 員
研究員



16 長野駅周辺を
考える

以前にも述べたように、にぎわいが創生された「光」の部分ばかりに見える善光寺口周辺ではあるけれど、それに目を凝らしていくと、残念なことに「陰」の部分も垣間見える。

その最たる例を南千歳の一角に見い出すことができる。ご存知のように、南千歳町商店街は、守谷第一ビルディング（通称・アイビススクエア）、東急百貨店を南北に連なぐ縦軸と、表参道と長野大通りを東西に結ぶ横軸、そして長野大通りに沿ってシエルシェに連がる大通り南北軸によって、南千歳公園を内包したコの字の商業

ゾーンを形成している。

このエリアは一見して、四季を通じた多くのイベントや個性ある店舗づくりによって、商店会と来街者がうまく呼応した商業空間を造形している。

その中で、ひととき陰を濃くする部分が通称「しょっぱこあ」と呼ばれる150m程の連棟型店舗併用住宅が連続する一角である。

今も1階の店舗は歯が抜けたように「テナント募集」の貼り紙ばかりが目に入る。

人気の少なさを強調するように、この季節、廃ガスによって黒く淀んだ雪の吹きだまりが、さらにその寂しさに追い討ちをかけるように目に飛び込んでく

るのは、筆者だけだろうか。

プライベート(PB)ブランドの台頭は、商店街そのもののありようを変えてしまった。それが始まったのは1990年代辺りから、日本では東京原宿の竹下通りが起源とされる。

(続く)

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商會役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか3委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長



空き店舗が並ぶしょっぱこあ商店街